

からだ

医療のページ

◆「病院の実力」2015版 実力。関心の高い5大がん(肺、胃、大腸、肝臓、乳がん)や心臓・血管、甲状腺の病気など全国100の病院を1冊にまとめた。心臓・血管、甲状腺の病気など全国100の病院を1冊にまとめた。掲載病院数は8700におよび、専門医による解説、なか

臨床の現場から
③ チーム医療という言葉を使っていますか? かつて医療の現場は、医師と看護士だけで成り立っていました。10年前から薬剤師、理学療法士、作業療法士、言語療法士、診療放射線技師、看護師、ソーシャルワーカーなども協力して、患者さんに最善の医療を提供する「チーム医療」の考えが浸透し、主流となってきました。背景には、医療の進歩に伴って、担当領域が細分化され、多く

患者も参加「チーム医療」

の専門職の助けなしには十分な対応が難しくなったことがありま。チーム医療では、医師を中心に、診断、治療に携わる専門家が患者さんの病状を理解し、患者さんの退院と今後の生活に向けて体制作りなどについて、それぞれの立場から意見を述べ、検討します。

以前は、医師が考えた方策に患者さんが従うのが主でしたが、近年は考え得る方策をすべて説明した上で、患者さんが自分で納得して選択するのが当たり前のようになりました。無理と思わないで、新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどで、身近な病気の正しい知識の蓄積から始めてはいかがでしょうか。

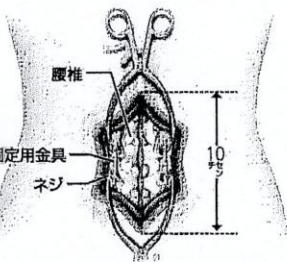
「病院の実力」をスマートフォンで、アイフォン、アイパッドに対応したアプリ発売中。詳しくは、<http://yomidr.jp/page.jsp?id=56156>

にし礼さん、武田鉄矢さんの貴重な開病体験談も。 般書店と読売新聞販売店で扱っています。 (読売新聞社、648円税別) ◆身近な人をくした体験者が集まる「グリーフカフェ」 2月12日午後7時、東京都世田谷区のドットコム・経営農大通りの店。対象は16〜30歳。語り合いを通して体験者の思いを共有する。 無料。問い合わせはThe Eggs Tree House 経営グループカフェ(03・5477・8072)。



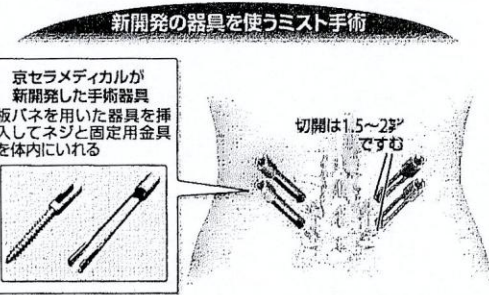
最小侵襲脊椎安定術(MiST=ミスト)

老化により腰の背骨が前後や左右にずれ、中を通る神経が圧迫されると、神経がマヒして歩くのも困難になり、ずれた骨を元通りに固定する手術が必要になる。近年、背中の中を1.5〜2センチずつ切開し、特殊なネジでずれた腰椎を固定する、米国生まれの負担の軽い手術が行われている。器具を日本人向けに改良し、さらに負担を減らす技術の開発も進んでいる



大きな切開が必要な従来手術法

- 2週間程度の入院が必要
- 手術後に感染症にかかると危険性が高い
- 手術後に筋肉組織が硬くなる「線維化」が進む。「手術部位に鉄板が入っているようだ」と訴える患者が少なくない



利点	注意点
手術後の回復が早い。入院期間が従来切開手術に比べ、半分程度(約1週間)ですむ	切開が小さいため手術部位を確認できる視野が狭く、執刀医に熟練が必要
手術時の出血量が少なく、手術後に感染症などの合併症を減らせる可能性がある	固定器具を設置する際に用いるガイドワイヤが骨を突き、血管を傷つける恐れがある
新開発の器具は、ネジの頭部を日本人の体格にあわせて小さくできたため、手術後に体内で関節や筋肉などを傷つけにくくなるのが期待される	手術部位をX線撮影で確認しながら手術を行うので、執刀医らの放射線被曝量を減らす工夫が必要

◆ミストを実施している主な医療機関 ※●は現在、新開発の器具を使用

製鉄記念室蘭病院	北海道	名古屋第二赤十字病院	名古屋
青森市民病院	青森	はちや整形外科病院	名古屋
●防衛医大病院	埼玉	京都第一赤十字病院	京都
●慶応大病院	東京	関西医科大学病院	大阪
●練馬総合病院	東京	岡山大病院	岡山
●済生会中央病院	東京	川崎大病院	岡山
●東京脊椎神経センター	東京	九州中央病院	福岡
●川崎市立川崎病院	神奈川		

老化が進むと腰の背骨(腰椎)が前後や左右にずれ、中を通る神経が圧迫される。この状態があると、腰痛や脚のしびれ、歩くのも困難になる。ずれた骨を元通りに固定する手術が行われる。近年、背骨の中を1.5〜2センチずつ切開し、特殊なネジでずれた腰椎を固定する、負担の軽い手術が行われている。慶応大病院(東京)と医療機器メーカーの京セラメディカル(大阪)は、米国生まれのこの方法を日本人向けに改良した器具を開発した。

低侵襲脊椎固定術

患部の皮膚を大きく切り開いて腰椎を覆う筋肉をはがし、露出した骨にネジを入れて固定するのが、現在でも主流の手術法だ。こうした手術では症状が改善するものの、2週間程度の入院が必要で、感染症の危険性が高まる。手術後、同年たつても「手術跡に鉄板が入っているようだ」と訴える患者も少なくない。慶応大病院医師の石井賢さん(46)は、「手術をした部位で筋肉組織が硬くなる『線維化』が進んでいる」と説明する。

と開発されたのが、背中の中を1.5〜2センチずつ切開する「最小侵襲脊椎安定術(MiST)」だ。2001年頃に米国で始まったMiSTでは、金属製のパイプでネジと固定器具を体内に挿入し、骨をつなぐ。日本でも05年に欧米製の器具を使う手術が始まった。しかし、器具やネジが欧米人向けで大きく、手術後にネジの頭部の直径14〜17ミリが隣接する骨や筋肉を傷つける欠点があった。慶応大病院と京セラメディカルは08年から、日本人の体格に合った器具を開発し、格に合ったネジや器具の開発を進めた。その結果、金属製パイプのかわりに2枚の板パイプで作った器具を体内に挿入する方法を考案し、小さなネジ(同10.5ミリ)を確実に腰椎へねじ込めるようになった。昨年2月に厚生労働省から医療器具として承認を受け、同病院と関連病院で使用している。MiSTの技術の研究する「日本MiST研究会」に参加する医師が、医療機関でも近く使用を開始する計画だ。東京都の高齢男性は、腰椎が前に約1センチずれる腰椎変性すべり症と診断された。両足の神経マヒで100歩以上歩けなくなると。排せつも不自由な

状態が1年間続いていたが、重い心臓病があるため、腰を大きく切り開く手術には耐えられないと判断され、昨年9月に慶応大病院で新開発の器具を使った手術を受けた。MiSTは、新しい器具を使うため、執刀医には熟練が必要だ。ただ、石井さんの調査では、大きく切開する方法で約3割だった手術後の感染症発症率が、MiSTでは0.4%に抑えられるという。入院期間も1週間程度ですむ。石井さんは「手術後の生活の質がより良く保て、手術の合併症が減ることが期待できると話している」。

ずれた腰椎 ネジで固定